鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 21 年 10 月 16 日）

為政第二

21　或ひと孔子に謂いて曰く、子奚ぞ　政　を為さざると。子曰く、書に云う、孝なるかな惟れ孝、兄弟に友に、有政に施すと。是れ亦　政　を為すなり。奚ぞ其れ　政　を為すことを為さんと。

或人とは、陽貨です。

陽貨が、「あなたはどうして仕官をしないのですか」と孔子に聞きました。

孔子が言いました。「書経に書かれているではないか。父母に孝というのは、全ての善のもとであり、兄弟が仲良くすれば、当然国の政治にも影響を及ぼすものだ。これは則ち政を行なっていると考えてよい。どうしてこれ以上、政をなそうとするのか」

この場合の仕官は、職業政治家ですから、国からお金を貰って、商売として政治を行っているわけです。自分の心の奥深い所から、国を良くしたいとか社会に奉仕したいと思って政治を行っているのではない。単なる職業政治家では、悲しむべきものだと言っています。

渋澤栄一は解説の中で、「今の御世の政治家は、自称政治家で職業政治家であると断ぜざるを得ない」と言っています。

22　子曰く、人にして信無くんば、其の可なるを知らざるなり。大車に輗なく、小車に軏無くんば、其れ何を以て之を行らんや。

孔子が言うには、人に信というものがなければ、いったいどうなるであろうか。父母・兄弟・姉妹・友人・師、その他信じられる人はどれだけいるか、よく考えてみなければならない。牛が引く大きな車に輗がなく、馬が引く小さな車に軏がなければ、どうして車を動かす事ができようか。

輗も軏も、車と牛馬を繋ぐものですから、それがなければ動くわけがない。人も同じで、信がなければ、人と人との間を繋ぐことはできない。信は不可欠のものであると言ってい

ます。論語の中には、「信」という文字について説かれた所が 15 箇所あります。ですから孔子は、非常に重要視しているとお考え下さい。

23　子張問う、十世知るべきかと。子曰く、殷は夏の礼に因る。損益する所知るべきなり。周は殷の礼に因る。損益する所知るべきなり。其れ周に継ぐ者或らば、百世と雖も知るべきなりと。

子張が孔子に、「十代先の王朝は予知できますか」と尋ねました。

孔子が答えました。「殷王朝は、夏王朝の礼式によって出来上がっている。余剰を減らし、不足の部分を足して成立している。周王朝は、殷王朝の礼式によっている。同じく、余剰部分を減らし、不足部分を足している。ということであるならば、周に継ぐ王朝ができたとしたら、今までの経験をもって推せば、百代先まで未来を予測する事は可能であろう。」

渋澤栄一は解説の中で、

「明治 4 年 7 月 13 日に廃藩置県の令が出て、武士による政治は終ったが、自分では予測が出来なかった。自分がその当時思っていたことは、幕府が倒れたら、豊臣の五大老の政治のようになると考えていた。わずか 60 年先のことすら予測できないわけだから、十世先までは、とても考えられるものではない・・・」と言っています。

24　子曰く、其の鬼に非ずして之を祭るは、諂うなり。義を見て為さざるは勇無きなり。

鬼とは、祖先です。

孔子が言うには、自分の祖先でもないのに祭るという事は、諂っているのだ。いくら諂っても、自分の祖先でなければ、幸いは来るものではない。人間として行なうべきことを行なわないのは、勇氣がないということだ。

渋澤栄一の解説を申します。

「義を見て為さざるは勇無きなり」で、大塩平八郎の高弟で宇津木矩之丞（うつぎのりのじょう）という人について書いています。この人は彦根で陽明学を教えていましたが、大塩平八郎の決起の陰謀を知らずに会いに来て、大塩平八郎から決起に加わるように勧誘さ

れました。拒絶をすれば殺されるということが分かりながら、そして夜中に再度説得に来るであろうし、その時にも敢然と拒絶をする覚悟で大塩の家に泊まり、遂に殺されました。殺されるのが分かっていても、不義を知って止めようとしたのは、本物の勇氣であると渋澤栄一は紹介しています。

今の時代で考えれば、氣になるものは「子張問う、十世知るべきかと」の部分です。

予言者であればいざ知らず、一つ一つの事実を積み上げて予測をする事はなかなか難しい。やはり、かくあるべきという理想を持ち出して、それによって「こうしたい」というところまでは言えるけれども、「こうなるであろう」とは言えません。「こうなるであろう」とは言えないけれども、努力する事によって、そこに少しでも近づくことは可能であると思っています。

目先のテーマとしては、日本の中では八ッ場ダムの行く末や非核三原則の扱い、又、亀井大臣が提唱している金融モラトリアムの落とし所・・・このあたりを見ていくことによって自分自身で予測する事が可能であろうと思います。その結果として、予知・予測の難しさを感じるのではないかと思います。